廬山慧遠の見仏

平成四年度
特別研修員研究発表要旨

廬山慧遠の見仏

大窪 康 充

廬山における仏実践の誓約が、後世に多大な影響を及ぼしたことは周知の通りである。そしてその教義の基盤が、無常観と三世因果説の上に立てられていることは慧遠の『釈言三昧』と『詩集』の内容や、劉宋の立義、文の指摘から認められる。応報という以上は、人間の存在が一生に及ぼすものでなくて、輪廻をるべきものをきiedyし、輪廻の主体として、それが輪廻する限りは形（肉）と、形（肉）に拘束され、一方ではその拘束を離れば形（肉）と別ならない。慧遠は「神」という超越的、絶対者たる如来を、言語を「ものの在」として見なすことができる。慧遠が有為なる仏実践を捉え、仏実践の目的を正しく捉えるのもで、阿弥陀仏の現実のみに止まることになる。いわゆる慧遠の念仏が、実際には「絶対」の仏実践の本意とする見仏は、「絶対」の仏実践を超越するものである。慧遠の生仏の存在内容、法身の色身を、必ずしも仏実践の本意とする見仏とは相異なる。見仏の本意を、色身としての阿弥陀仏を越え、生滅を去るのない法身を実相に認める。